

2024 年度

愛知の読書・学校図書館教育

(第 53 集)

目次

I はじめに 2

II 研究の内容 3

 教育課程編成活動について 3

 実践事例 4

III 第 7 4 次教研のまとめ 6

 (1) 情報活用について 6

 (2) 図書館経営について 6

 (3) 読書活動について 7

 (4) 図書の活用について 8

 (5) 情報交換・研究協議 9

 (6) 助言から 10

IV おわりに 10

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会「読書・学校図書館」部会
2024 年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

ブロック推薦

名古屋			尾張			三河		
名 前	単組	分会	名 前	単組	分会	名 前	単組	分会
原 由布子	名古屋	桜小	○杉本 旭	愛知	春木中	◎岡本 侑馬	碧南	東中
近藤 志保	名古屋	南特別支援	河合 俊和	春日井	味美中	杉浦 恵梨子	安城	丈山小

第 71、72、73 次教育研究全国集会リポート提出者

	名 前	単組	分会
第71次	平松 亜弥美	豊橋	八町小
第72次	栗原 えりな	岡崎	山中小
第73次	日高 太地	尾北	犬山北小

第 74 次教育研究全国集会 リポート提出者 上村沙悠美（豊橋・二川中）

I はじめに

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものといわれている。しかし、スマートフォンやゲーム機等の情報端末が発達し、さまざまなSNSや動画配信サービスが普及する中、子どもたちの生活も変化し、「読書離れ」が指摘されている。今日、子どもたちに読書の楽しさを味わわせ、読書を通して豊かな心を育んでいくことは重要な課題である。

また、本を介して意見や感想を交流することで、人と人とがつながりをもち、心を通わせていくことも求められている。SNSをきっかけに起こるトラブルや事件は、人との関係の希薄さが引き起こしている一面がある。こうした子どもたちに読書による人との間接体験をもたせたり、友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人とかかわりの良さを感じさせる上で有効であると考える。

そして、学校現場では学習者用タブレット端末が日常的に活用されるようになり、生成AIや対話型AIなどにも注目が集まっている。情報化が高度にすすんだ現代、子どもたちにも、膨大な情報の中から情報を収集・活用していく力が求められている。学校図書館では、以前より情報活用能力の育成を課題の一つとしてきたが、よりいっそうの整備・充実をはかるとともに、情報を収集するだけでなく、自分にとって本当に役立つ情報であるかを正しく判断・選択しながら自らの課題解決に活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

こうしたことから、現代の子どもたちにとって必要な学校図書館教育の役割は、次の3点であると考ええる。

- 読書の楽しさを味わわせ、すすんで読書に親しむ態度を育て、豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割
- 友だちやいろいろな人との心の交流を通して、豊かな人間形成をはかるための「学びの場」としての役割
- 利用しやすい環境を整え、自らの課題を解決するために、図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「情報・学習センター」としての役割

学校司書の配置がすすめられ、司書教員と学校司書との連携による実践の報告も増えている。また、学習者用タブレットをはじめとするICT機器を活用した、新しい学びの形も模索されている。子どもたちが多くの本と出会い、自らの課題を解決していくことで、現代社会を力強く生き抜く力を養い、よりよい未来を築いてくれることを願っている。

II 研究の内容

教育課程編成活動について

心豊かな子どもを育てていくためには、読書を通してさまざまな体験をしたり、本を紹介して人と人がふれあえる活動を行ったりすることが大切である。また、多様な情報を収集するとともに取捨選択し、自ら課題を解決する力を培っていくことも大切である。そのためには「読書センター」としての役割のみならず、「学習・情報センター」として魅力ある図書館運営と活用についての研究が重要となってきた。

本分科会では、言語活動の充実をはかりながら、「ゆたかな学び」のある読書指導のあり方や、読書活動を取り入れた授業実践の手だてを追究してきた。そして、教育課程編成については、次の点を考慮した。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

- 「基礎・基本」について
 - ・ 読書の楽しさを味わい、すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに、読書の習慣化や継続化をはかる。
 - ・ 読書活動を通して、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表現する力」を培っていく。
- 「生きてはたらく力」をのばすための重点
 - ・ 読書を通して、他者とかわり合いながら「生きる力」を育む。
 - ・ 日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付く。

また、学校図書館において「わかる授業・楽しい学校」を実現させていくためには、読書指導と利用指導を学校の教育課程に位置づけ、系統的に指導していく必要がある。

「ゆたかな学び」を育てていくため、小・中学校における学びのポイントに沿って実践を行っている。

【小・中学校における「ゆたかな学び」のポイント】

		読 書 指 導		利 用 指 導
		読 書 能 力	読後の活動能力	図書館活用の実践力
小 学 校	低	やさしい読み物を楽しく読む。	興味をもった場面を話したり絵に表現したりする。	好きなことや疑問に思ったことを調べる。
	中	いろいろな読み物を読み、読書範囲を広げる。	感動した場面を話したり絵に表現したりする。	知識や情報を得るために図書館を活用する。
	高	関心をもってさまざまな分野の本を読む。	感想を意見交流したり、効果的な表現方法で表現したりする。	課題や目的に応じて必要な情報を収集し、取捨選択して活用する。
中 学 校		目的に応じて適切な本を選び、すすんで読む習慣をつける。	感想や意見を交流していくことで、ものの見方や考え方を広げ、深める。	参考資料の種類や特性を知り、活用する。目的に応じた方法で発信する。

実践例 「他者とかかわり合うことで、豊かな発想で読書に親しむ子の育成」
— 5年 読書活動と国語科「友だちと一緒に、本を紹介しよう」の実践を中心に —

教育活動にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」

- ・ 読書の楽しさを味わい、すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに、読書の習慣化や継続をはかる。
- ・ 読書活動を通して、「考える力」「感じる力」「表現する力」を培っていく。

○「生きてはたらく力」

- ・ 読書を通して、他者とかかわり合いながら「生きる力」を育む。
- ・ 日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付く。

1 ねらい

『仲間とかかわり合いながら』行う読書を軸として実践し、国語力や人間力などの人格を形成できる＝『教養的読書』と、大人になっても読書に親しむ＝『娯楽的読書』のきっかけとなるような新しい読書の形を検証していきたいと考えた。

2 実践例における「ゆたかな学び」のポイント

子どもの実態に合った『つながり』を意識した本を読む読書活動を設定し、他者の考えを受け入れたり、自分の考えを膨らませたりする活動を行い、子どもが豊かな発想や新しい視点をもって読書を楽しむことができるようにする。

3 実践について

(1) 子どもの実態に合った『つながり』を意識した本を読む読書活動を設定

㊦子どもの実態に合わせた本、作者の選定・精選手だて

今回は、『仲間とかかわり合いながら』、『本と本のつながり』を意識した読書活動を行うべく、くすのきしげのり氏の本を中心に授業を展開していった。くすのきさんとリモートでインタビューさせていただき、子どもの意欲を書き立たせるために、なぜつながりのある本を書こうと思ったか、本実践のサイドストーリー制作の基となる本、『三年一組、春野先生！』の制作秘話と本学級へのメッセージをいただいた。

また、岡崎市立中央図書館と連携して集めたくすのきさんの本を読み、『くすのきマップ』と題して、登場人物の相関図を作る活動を行った。「先生、きつとこの後、この人の子供が活躍する話がまた生まれるよ」とA児が言うと、他の子どもたちも「そしたらこの話に登場した場所も出てくるかな」と乗っかって対話することができていた。まさに『仲間とかかわりあい』養われる『想像力』が見えたようであり、手だて㊦のサイドストーリー制作へ繋げることができた。

㊧『つながり』をさらに意識するためのサイドストーリー制作

くすのきさんが描いた作品から得た想像力をいかして、より『本と本のつながり』を感じることができるように、仲間と新たな物語（サイドストーリー）を創作する活動を行った。①中心人物を個人で決める②ペアで物語の『起・承・転・結』を考える活動を行った。

まずは、自分の思いを整理するために個別で中心人物を決め、どんな話にしたいのかを書き

主人公	主人公	主人公
中田 俊輔くん	長岡さん	中田 俊輔くん
どんな話にしたいか 中田くんが、春野先生に いらいがなについて 教えてくれる。	どんな話にしたいか 春野先生が、中田くんに いらいがなについて 教えてくれる。	どんな話にしたいか 中田くんが、春野先生に いらいがなについて 教えてくれる。
どんな話にしたいか 中田くんが、春野先生に いらいがなについて 教えてくれる。	どんな話にしたいか 春野先生が、中田くんに いらいがなについて 教えてくれる。	どんな話にしたいか 中田くんが、春野先生に いらいがなについて 教えてくれる。

【資料1】個人計画シート

出させる。【資料1】個別の意見をもとに、意図的に組み合わせた。

(2) 他者の考えを受け入れたり、自分の考えを膨らませたりする活動を設定

⑨他者とかかわり合いながら自分の考えを広げるための『ペア活動』

作品作りに意欲をもった子どもたちは意図的に組まれたペアで起承転結の骨組みに分けた簡単な物語「サイドストーリー」の制作をはじめた。学習支援アプリ「まなびポケット」や「コラボノート EX」を活用しながら、子どもは自分と相手の意見を比較して、「この場面設定いいね!」「こんな結末はどうか」と話し合いをはじめた。【資料2】今回のテーマである「つながり」を意識した物語制作について、ペアだけでは立ち止まる場面もあったため、全体共有の場で教員が「つながり」について明確にしたり、軌道修正を図ったりすると、児童はさらにめあてを再確認しながら物語制作を行うことができていた。サイドストーリー制作を通して、本を読んで自分の膨らませた想像力に自信をもったり、友だちの意見を聞いて新しい物語の見方に気付くことができていたりした。



【資料2】ICTを活用しながらペア活動



⑩さらに多くの仲間とかかわり合いながら自分の思いを伝える『ビブリオバトル』

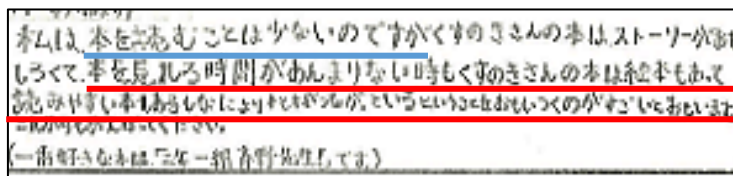
最後に、できた物語を友だちに紹介し合う「ビブリオバトル」の活動を行った。目的である「人を通して本を知る、本を通して人を知る」を活用し、溢れ出た発想力を他者へ伝え、他者の考えを自分が受け入れる本の面白さを共有する楽しさを味わわせるねらいがあった。登場人物のイラストを描いたり、「SCURATCH jr」を活用して紙芝居を作ったりと各々で工夫し、自由に表現することができた。【資料3】単元終了後の感想カードには、「自分では気づけなかったことも友だちと一緒にやったら、たくさん見つけることができた。」と新しい視点で物語を楽しむことができた。



【資料3】サイドストーリーのビブリオバトル

4 実践のまとめ

資料4は、単元を終え抽出児が書いたくすのきさんへのメッセージである。くすのきさんの作品のもつ『つながり』の楽しさや、感じた思いを形にすることで、豊かな発想力が



【資料4】単元終わりの抽出児のメッセージカード

生まれた喜びが書かれていた。手だてを講じることで、本と本のつながりを感じながら読むという新しい読書の楽しさを味わうことができていた様子だった。

ペアでのサイドストーリー制作を行うことにより、一人では考えつかなかった新たな視点で物語を楽しむことができた。今までは聞き手の立場のみにいる子も多くいたが、手だてを講じることで一人ひとりの考えがしっかりと形成され、それらを聞き手として受け入れながら、話し手として自分の意見を発信することにつながった。「読書が自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと」という読書活動の内容に沿った実践となり、この手だての有効性があったといえる。

昨今、デジタル化や他の娯楽が発展し、読書離れやコミュニケーション能力の欠落が問題視されている。調べ学習では、本を使わずにインターネットで調べ、読書においてもタブレッ

トを活用する人が増えてきた。便利であるからこそその利点を大切にしながらも、読書が豊かな感性や情操を育むことを子ども自身が理解する必要がある。『仲間とかかわり合いながら』『豊かな発想力をもちながら』生涯にわたって読書を楽しむ、この新しい読書の形をさらに研究し、大人になっても純粋に読書を楽しむことのできるような子どもの育成にこれからもつとめていきたい。

Ⅲ 第74次教研のまとめ

(1) 情報活用について

情報活用について、3つの実践が報告された。

岡崎の中学校では、「情報を適切に活用し、説明文を批判的に読むことができる生徒の育成」をめざした実践が報告された。電子機器の普及で国語辞典を引く機会が減る中、教科書以外の本を用いた情報収集の重要性が指摘されている。この実践では「クマゼミ増加の原因を探る」という教材を活用し、子どもたちに本とインターネットから得た情報の批判的な読み取りを通じて、仮説の立て方や検証方法を学ばせることをめざした。子どもたちは、授業で「証拠となる資料が十分か」を見極める力を養うために、チームで情報を収集し、活用する活動に取り組んだ。また、信頼性のある情報を効率よく集めるスキルを養うため、学校図書館や地域の中央図書館を利用し、情報カードも作成した。こうした活動により、生徒たちは説明文を批判的に読むことを通じて、本で得た情報からインターネットで検索するための手がかりを見つけたり、情報を収集し分析する中で自分たちの結論を導き出したりすることができた。

豊田の小学校では、「情報を正しく効率よく調べ、活用できる子の育成」をめざした実践が報告された。この学校では、調べ学習に取り組むときに図書やインターネットから必要な情報が見つけれなかったり、調べた情報を丸写しして調べ学習を終えてしまったりする様子があった。そこで、正しい情報を見つけ、自分に必要な情報かを吟味し、それらを使ってまとめられるようになってほしいと考えた。そこで、ペンタゴンチャート、KWLシート、Xチャートと学習場面に合わせた思考ツールを活用し、調べ学習のパターンを明確化した。また、調べたことを情報カードにまとめる際、枠を少しずつ小さくしていくことで、より観点が意識され短く簡潔にまとめられるようにした。情報カードを思考ツールで整理し、まとめの活動を行うと、自分に必要な情報の不足に気付く、再度調べ学習に取り組む子どもたちの姿が見られた。今後は、情報の信頼性にも配慮し、多様な情報源から選び取る能力を育成することが課題とされた。

一宮の小学校では、「子どもたちの確かな学びにつながる学校図書館」をめざした実践が報告された。本で探す技能として、日本十進分類法を用いた図書の探し方と百科事典を用いたテーマの探し方の2点の調べ方について学習した。分類番号の学習をすると、探したい本がどの分類番号に属するのか考えながら本を探す様子が見られるようになった。また、百科事典で身近な言葉を調べる学習を行った。百科事典がより親しみやすいものになり、調べ学習にも積極的に活用する様子が見られた。

(2) 図書館経営について

刈谷と海部の学校から、情報活用に関する実践が報告された。

刈谷の小学校からは、「人とかかわりながら読書の楽しさを味わう図書館まつりの取り組みについて」の実践が報告された。この学校では、学期ごとに図書館まつりを開催し、ペアでの読み聞かせや教員による読み聞かせ、親子読書、グループ読書、図書ビンゴなど、

さまざまな活動を通じて子どもたちが読書を楽しめる環境を作っている。これらの活動は、子どもたちがすすんで読書をしたり、図書館を積極的に利用したりすることを促進するものである。ペアでの読み聞かせでは、高学年の子どもが低学年の子どもに読み聞かせを行い、3学期には低学年が高学年にお返しする形で感謝の気持ちを伝えるというものである。教員のサポートを得て、子どもどうしが選書することで、ともに成長する場を提供している。また、教員による読み聞かせでは、さまざまな教員が読み聞かせを担当することで、子どもの読書の幅を広げている。親子読書では、親子での読み聞かせを宿題とすることで、家庭での読書時間を復活させることに成功した。さらに、図書ビンゴの企画は、普段図書館を利用しない子どもの来館を促し、図書委員の創意工夫がいきたイベントとなった。その結果、図書館の利用者が増加し、子ども間のコミュニケーションが活発化するなど、多くの成果が見られた。

海部の小学校では、「興味をもって本とかかわり、すすんで本に親しむ児童」を育成する取り組みが行われた。事前調査で、同じ本を繰り返し読んでいたり、自宅から本を持参していたりするなど、図書館はあまり利用されていない現状が判明した。そこで、図書室の環境整備として、季節や教科書に関連する本のコーナーを設置し、パズルやクイズも用意した。また、図書委員会が主催するイベントやキャンペーンを通じて、特に1～3年生の訪問が増加した。結果として子どもが楽しみながら図書室を頻繁に利用する様子が見られるようになり、学校図書館が魅力的な場所だということに気付かせることができた。

(3) 読書活動について

図書の活用については2つの実践報告がされた。

名古屋の小学校からは、子どもが多くの分類の本に興味を持ち、その良さを共有する力を育成する実践が報告された。事前のアンケートで、子どもが特定の分類ばかりを読む傾向が明らかになったため、多様な本に触れる機会を提供することが重要だと考えた。教員は読書タイムを設けて本を紹介し、多くの分類の本に興味をもてるようにした。そして、クラウド型授業アプリ「ロイロノート」で読書記録を分類ごとに色分けし、子どもの読書傾向を可視化した。また、中央図書館から未読の分類の本を借り、特に0・1類の本については教員が読み聞かせを行った。これから読みたい本をためる「未来本棚」のページ作成も行い、子どもたちは新しい分類の本に興味をもつようになり、友だちと本の良さを共有するブックトークも実施することで、読書への意欲が高まった。この活動を通して、子どもどうしで本を通じたコミュニケーションが活発になり、図書分類に関心をもつ子どもが増加したことが報告された。

豊田の中学校では、「読書に親しみ、想像したことを文章で豊かに表現することができる生徒の育成」をめざした実践が報告された。この学校では、特別支援学級の子どもがショートショートづくりに取り組む上で、自由な発想力、語彙力、構成力が重要だと考えた。このため、起承転結が明確な絵本や不思議な展開の本を選び、読み聞かせを通じて豊かな読書体験を提供した。また、蓄積した読書体験が可視化できる「読書の本づくり」や語彙一覧表を活用することで、新たな語彙を習得し、豊かな表現力を育成した。子どもたちは、自らの興味を反映した本を選ぶことで読書に親しみ、図書館司書にリクエストを伝えるなど、本を通じたコミュニケーションが活発に行われるようになった。この取り組みを通じて、子どもたちは、獲得した新しい語彙を使いながら創造したことを豊かに表現する力を磨き、ショートショートづくりに意欲的に取り組むようになった。

(4) 図書の活用について

図書の活用に関する実践は四つ報告された。

豊橋の中学校からは、三年生の国語科で行った、「仲間との交流によって読書の新たなおもしろさに気づく生徒の育成」をめざした実践が報告された。

読書について交流する経験の少ない子どもが多いことから、仲間と本について語り合う場を設定していた。仲間と読み深める楽しさや自分では気づかなかった魅力を知り、読書の新たな面白さを感じることができると考え、一つの物語を小集団で異なる視点で読みすすめていくリテラチャーサークル(LC)を手法に取り入れたり、ビブリオバトルや POP コンテストなどの言語活動をしたりしていた。

リテラチャーサークルの視点の学習を既習教材で行うことにより、コネクター・スポットライター・クエスチョナー・アクターのそれぞれの視点に応じた読み取りを子どもたちは行うことができた。仲間の違う視点からの意見は、子どもにとって刺激的であり、さらに本を深く読もうとするきっかけになった。

人に伝えたい思いを高めると題して行った活動では、学校図書館司書と国語科担当教員の協力のもと、ミニビブリオバトルを行い生徒が友だちの紹介した本を読んでみようと感じたり、他学級で行った POP コンテストでは、自然と本にまつわる会話が生まれたりした。

子どもたちが実践を通して、さまざまな視点から物語を読むという読書の新たな面白さに気づくことができる実践であった。

岡崎の小学校からは、一年生の保健学習で行った、「図書資料を活用し、進んで実生活に生かすことができる子の育成」をめざした実践が報告された。

携帯ゲーム機やスマートフォン、タブレット端末などの普及によって、身体にさまざまな悪影響があるとされている。特に、悪い姿勢で日々の生活を過ごすことは、内臓機能の働きや視力の低下など身体に悪影響を及ぼすと考え、『「ぐー・ぺた・ぴん」で正しい姿勢』の学習を通して、「図書資料を活用し、さまざまな考え方をもち、すすんで実生活に生かそうとする子ども」「正しい姿勢を保つことを継続的に意識し、自らの身体を大切にしようとする子ども」をめざした。

「ぐー」はお腹と背中にこぶし1つずつあて適度な空間を保つための言葉、「ぺた」は、足の裏を床に着けることを示す言葉、「ぴん」は、背筋をのばす言葉として使用し、姿勢が崩れそうになる前に声掛けたり、子ども自身で繰り返し意識できたりする言葉である。

ボランティアの方を招いて行う「読み聞かせ」と連携したり、専門的知識のある養護教員をゲストティーチャーとして招いたり、「ぐー・ぺた・ぴん」のわかりやすい言葉を使用したり、4人1組でのチーム学習で行ったりとさまざまな工夫があった。

子どもたちは、自分の姿勢確認シートに取り組んだり、姿勢に関する〇×ゲームや自分の座って書いている姿勢の写真を見てよい姿勢について話し合ったりして、楽しみながら姿勢について学べる実践であった。

西尾の中学校からは、三年生の国語科で行った、「読書を通して人の生き方や社会とのかかわりを考えることができる生徒の育成」をめざした実践が報告された。

小説を読むことの意義の一つが、登場人物の言動を迫体験したり、批判的に考察したりすることは人の生き方や社会とのかかわり方について考えることができることである。図書と ICT を活用し、作品が描かれた時代や作者の背景への理解を深め、小説の読み方の観点を生かして作品を批評する活動を設定し、めざす子どもを育成する方法を探っていた。

学校司書や情報支援員と協力し、入念に授業準備を行った結果、「作品の背景を調べるこ

とへの問題意識をもつ」実践に取り組んでいるときには、子どもたちが「作品の描かれた当時の中国はどんな時代だったのか調べて、どんな思いで書いたのか考えてみたい」と問題意識をもつことができた。

振り返りでは、「読書はさまざまな考え方や、価値観に出会い、自分を振り返ることができる。本の中の再開の場面は、小学校の頃仲が良かった後輩との関係が思い浮かんだ」と自分を見つめ直し読書の意義を見出す子どももいた。

タブレットを活用することは作業を効率的に行うことができ、資料をもとに作品の背景をとらえることができる。調べる手段として、図書と ICT の特徴の違いを子ども自身が自覚して活用できるように今後も指導をしていくことが大切である。

最後のみよしの中学校の発表は、三年生の国語科で行った、「文章や図書資料に親しみ、自らの考え方や生き方を見つめ直す生徒の育成」をめざす実践が報告された。

授業の場では、自分の意見をもっていても恥ずかしくて、自ら発言することができない子どもが多い。実践で扱う『論語』は、孔子によって、人間の生き方についての鋭い観察や深い思索が込められているため、自分の考えや生き方を見つめ直すきっかけとなる言葉として最適と考えた。自分の考え方や生き方を見つめ直し、よりよく生きるための「心のよりどころとなる言葉」を見つけて欲しいという願いもあった。

学校には『論語』に関する本は3冊のみで、難易度も高く、授業で活用するのは難しい。また予算も限られており、購入することも難しいため、市中央図書館の学校支援を利用していた。

実践を通して、子どもたちは『論語』をもっと知りたいと能動的に学習に取り組むことができた。学校図書館で同じ本を複数冊購入することは難しいが、市中央図書館と連携し、図書館を「学びに使える学校図書館」＝「学習・情報センター」として整備・活用していくことが大切である。

(5) 情報交換・研究協議

○ 学校図書館ボランティアについて

学校図書館ボランティアの方の活動内容について話題が上がった。各学校によって人数や日数が違うものの、図書館の掲示物を季節や行事ごとに更新したり、本の修繕やブックコートをかけたりといった細かい活動をしてもらっている学校や、朝読書の時間に児童・生徒たちに読み聞かせ活動をしてもらっている学校が多いようであった。さらに、学校図書館司書や司書補助員とボランティアの方が連携し、図書館の開館閉館、貸出返却業務まで行っている学校もあった。しかし、図書館ボランティアがいない学校も多いため、学校間で図書館の取り組みに差があることが気にかかった。また、研修の有無について質問が挙がったが、図書館司書の方にはあり、ボランティア対象の研修はないという回答があった。ただ、一部の学校は図書館司書の方が本の修繕などをボランティアの方に教えているという報告があった。

○ 情報の取捨選択の仕方に関する実践について

図書館を活用した実践報告の中で、知り得た情報の信憑性を判断する力や、情報を取捨選択する力を身につけさせるために、どのような実践をしているのかという質問が出た。それに対して、フェイクニュースが引き起こした事件を紹介して子どもたちの興味を引いたり、官公庁や企業などの信頼できる出典先を提示してから授業を展開したりしているとあった報告が上がった。ただ、このような手だてをしても、インターネットを鵜呑みにしてしまう子どもも多く、どのような手だてが効果的なのかをもっと考えていく必要があると感じた。

(6) 助言から

○ 学校図書館ボランティアについて

学校図書館ボランティアの依頼は、教員からすると煙たがられるのではないかと心配する気持ちもあるが、実際は喜んで取り組んでくれる保護者も少なくない。むしろすすんでやりたいという保護者もいる。以前は、小学校の方から保護者の方むけに図書館ボランティア募集のプリントを配布し、本の修繕作業などを月1回くらいで行ってもらっていた。そうすると、本の修繕がきっかけとなって保護者の中で交流ができ、自然と図書館の掲示物を作ったり読み聞かせサークルを作ったりという流れができることがよく見かけられた。時代も変わり、実現が難しいところもあるかもしれないが、学校の中や授業参観とは違う普段の子どもの様子が見られる機会として喜ばれる保護者の方もいるようなので、各学校の実態に合わせながら、よりよい図書館ボランティアの取り組み方について考えていく必要がある。

○ 情報リテラシー教育

大学生たちを見ていると、正しい引用の仕方、出典の示し方を分かっておらず、レポート作成の課題を与えると、ウィキペディアを閲覧することが多い。しかし、ウィキペディアはネット上で誰でも編集できるため、情報源として不適切であると指導をすると、学生がどの情報を引用すればいいか分からず固まってしまうが多いという。そのため、ウィキペディアの情報をそのまま引用するのではなく、ページ下部にある引用元に注目させ、そこに記載されているホームページや文献を見てレポートを作成するように指示をされているそう。現在、小・中学校でも本やインターネットから情報を集めてレポートを作成する課題が増えてきている。正しい引用の仕方や出典の仕方を指導し、繰り返し実践させて身につけさせていく必要があると感じた。

○ 実践発表から

リテラチャーサークルの手法を取り入れた読書活動、紙芝居や学級文庫も併用した保健の学習、図書資料とICT機器の両方を活用した調べ学習や批評活動などの手だてが報告された。全体的に、作品の時代背景や語句や表現の意味、現代語訳の活動といった、読みを深める活動で図書資料とICT機器を活用しているようであった。教科書を読むだけでは、古典や「故郷」といった国語教材の読みを深めることは難しいため、このような実践は効果的であると思う。また、国語科だけではなく、小学校低学年の保健の学習で、正しい姿勢について学ぶために図書館や図書資料を活用した実践報告もあった。各教科の実践の副活動や資料といった自然な形で図書資料を活用していけるとよいと感じた。

IV おわりに

本年度の県集会では、学校司書や市立図書館と連携を図りながら、教科や単元の学びにつながる本を、子ども自らが選択して、問題解決のために活用していく実践についての討論が中心となった。また、図書を通して情報を収集する過程で、情報の有用性や信頼性の高さを判断する力をどのように身につけさせるか、その方法や指導法について話し合われた。

個別最適化を推奨する現在の教育においては、学びの材料として図書資料を活用したり、物語の内容を読み取りながら理解したりすることが重要性である。また、インターネットと図書資料による調べ学習のそれぞれの利点を子どもが理解したうえで、効果的に活用していかななくてはならない。さまざまな教科において読書・学校図書館との併用をすすめていくための実践報告、および、活発な意見交換が行われた。

情報交換では、図書資料の活用、図書館運営、読書活動をすすめていくための、教員と学校司書との連携や保護者とのかかわりについて情報交換がされた。読み聞かせ活動については、担任する学級とは異なる学級での読み聞かせや、保護者による読み聞かせ、異学年どうしの読み聞かせなど、交流の中で読書の楽しさを感じさせるという事例が紹介された。また、学校司書との連携についても、校内の図書館の本から図書資料として活用したい図書を学校司書と連携しながら選定するだけでなく、市内の図書館からも本を貸してもらい、活用しているといった事例が紹介された。

限られた時間の中でも、読書活動や図書の大切さを子どもに実感させることができる支援や教育をめざし、各自治体の図書教育の動向が意見交換された。

今後に残された課題は以下の３点である。

- (1) 学校図書館ネットワークを活用しながら、子どもたちの自主的・自発的な学習活動を支援したり、授業の内容を豊かにしてその理解が深められたりするような「学習センター」としての機能を充実させていくこと。
- (2) 地域社会と連携した魅力的な学校図書館づくりのために学校司書や図書館ボランティアとの連携をすすめてくこと。
- (3) 子どもたちが物事や学びに対して、具体的な意見や根拠をもてるように、読書活動や図書活用、図書館連携を行う工夫

学校の実情はさまざまであるが、これからも、子どもたちが読書を楽しみ、読書活動が豊かな心を育むとともに、学びの基礎を築くものになるよう取り組みを続けていきたい。